

# 白山麓の「ネコイズミ」とネコを飼う習慣について

叶内 敦子 明治大学文学部地理学研究室

## “NEKO-IZUMI” (CAT’S BED) AND THE FOLKWAYS OF KEEPING A CAT IN HAKUSAN AREA

Atsuko KANAUCHI, *Department of Geography, Faculty of Literature, Meiji University*

### はじめに

石川県白山麓の民具資料のなかには、出作り地でネコを飼うために使用された「飼育箱」が多く残されている。この木製の飼育箱やワラ製の飼育器は、「ネコノコヤ」「ネコイズミ」などと呼ばれ、焼畑を行っていた頃(1960年代)にはネコを飼う家ではごく普通に使用されていた。焼畑が盛んであった戦前は、白峰村の本村・出作り地両者においてもネズミ捕りのためにネコを飼うことが多く、また大切に飼われた。しかし、最近は焼畑耕作も行なわれず、その中心であった白山麓の白峰村ではネコを飼うことは少なくなり「ネコノコヤ」「ネコイズミ」も日常生活からは姿を消している。現在ネコは、愛玩動物であり、ネズミ捕り用の「家畜」として飼われることはほとんど無くなった。本論では、著者が白峰村で行なった聞き取り調査を中心に、おもに戦前の白山麓のネズミ捕り用の「家畜」としてのネコの飼育に関する習慣と、ネコの飼育に使用した「ネコイズミ」について報告する。

聞き取り調査にあたり、快くお話しいただいた方々と調査に際しお世話になった、千葉徳爾先生、石川県白山自然保護センターの岩田憲二氏に厚く御礼申し上げたい。なお、この調査は白山自然保護調査研究会の研究費によって行なった。

### ネコの飼育に関する習慣

聞き取り調査は、ネコの飼育に関して、1) なぜネコを飼うのか、2) 飼育していたネコの種類、3) ネコのやり取りの習慣、4) ネコの飼い方、の4項目を中心に行なった。

また、聞き取りは「焼畑を行っていた頃」の話である。

#### 1) なぜネコを飼うのか

聞き取りの結果、ネコはネズミを捕らせるために飼われていた。出作り地でのネズミ(主としてアカネズミ・ハタネズミ)の害は、焼畑地で栽培している自給用の穀物に対するものと、養蚕に対するものの2つであった。

ネコイラズが普及するまでは、ネズミの害は相当激しく、焼畑に植えてある穀物と、収穫して貯蔵してある穀物の両方ともに食い荒らされた。また、養蚕への害もひどく、カイコも食い荒らされた。白山麓のこの地域は養蚕は重要な現金収入源であり、ネズミの害は深刻な問題であったため、ネズミ取りのために出作り地でも本村でも(本村は主としてイエネズミによる害)ほとんどの家でネコを飼っていた。

#### 2) ネコの種類

飼いネコの種類(毛並)についてみると特定の種類のネコが好まれていた。出作り地では、必ず白黒の「ヨモギネコ」を飼った。これは、出作り地ではネコはタカ(鷹)にさらわれることが多く、野外で目立つ白ネコを飼うことは避けることが多かったためである。タカとネコについては、「タカはネコのキモを食べると高く飛べる」という言伝えも聞いた。

### 3) ネコのやり取りについて

焼畑耕作地域ではネコはネズミとりのために欠かせないものであり、また出作り地ではタカに取られることが多かったため、子ネコのやり取りも頻繁に行なわれ、その授受にさいしては一定の習慣が成り立つほどであった。その習慣は、ネコの食べる分としての食物を付けて他の家へやる場合がほとんどであった。ネコを貰う側にはあまりその例がないのは、毎年極めて多くの子ネコが生れたからであろう。

- ・「二文二升」現金二文もしくは、ヒエまたはアワ二升。
- ・ニシン(ミガキニシン) 2本
- ・ニシン(〃) 1束(100本、当時20~30銭)

などがネコのやり取りの相場であった。「二文二升」の場合、二文といっても実際には現金ではなく、当時主食であった、ヒエ・アワのどちらかを付けることが多かった。ネコは貰われてからはこれら雑穀食で育ち、肉食はネズミを捕るかカエルなどを捕って食べる以外に人から与えられる事はなかった。逆に言えば、それだからこそネズミを盛んに捕らえたといってもよいだろう。また、ネコの子を貰う時は籠に入れ、外が見えぬように蓋をしたり包んだりして連れてくる。そうしないと必ず道を覚えて親のいる家に帰ってしまうといい、『子ネコの貰い』はその持ち物でわかるなどとも言われている。

### 4) ネコの飼い方

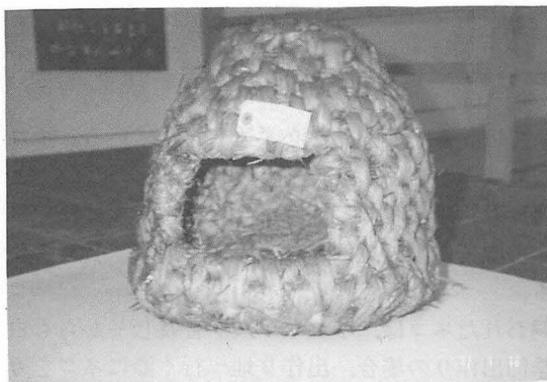
i) ネコイズミ ネコはネコ専用の飼育器に入れて飼った。この飼育器は「ネコイズミ」「ネコノコヤ」「ネコツブラ」などと呼ばれ、全て手製で名称、材料、形態など白山麓でも多少地域によって違いがあるが、現存するものは、大別すると木製の箱型のものとワラ製の釣鐘型の2種類である。木製の物は箱形でミカン箱よりやや小型であり、側面に四角形の出入口がある。上下二段とし、親子2匹を飼った場合もあるが、通常一戸で一匹であった。その理由は食料として多くのネコに与えるほどの量がないことが第一であろう。第二に何匹も飼うと、必ずあまりネズミを捕らないネコができるといわれている。

「ネコイズミ」のワラ製のものはワラを釣鐘型に積み上げてこれを紐で編んで止め(巻き編み)、側面に出入口を作る。典型的なもの2種類を写真に示す。

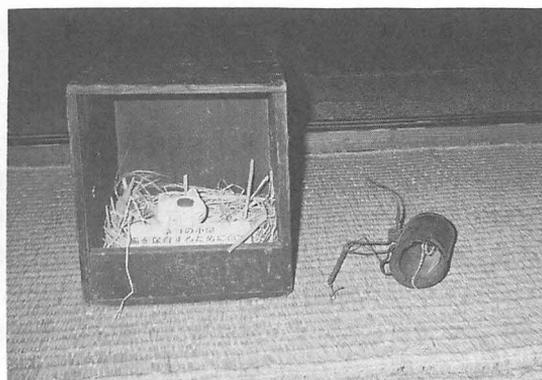
「ネコイズミ」は、中にワラやボロきれを敷いて使用する。ワラは柔らかいハカマの部分を使用した。家のなかでの置き場所は決まっており、イロリ端の「カカザ」の横にイロリのほうに入り口を向けて置いた。

ii) 「ネコイズミ」の材料 「ネコノコヤ」「ネコイズミ」は、全て自家製であった。木製、ワラ製の材料の違いは入手しやすい材料を使ったためと考えられる。木製の場合、材料は出作り地周辺で入手しやすい木材(スギ板が多い)を使用した。ワラ製の場合は、水田耕作を行なっていないところでは、購入したワラで作った。大道谷の出作りの場合は、ワラは勝山から買ってきた。戦前の価格でワラは1束=12把で10円で、生活用具を作るために、一冬で約50束使った。

以上が聞き取り調査の結果である。聞き取りを行なったなかには、ネコを飼ったことがない家もあった。多くはネコの嫌いな人がいる家で、そのような家では、現在でもタケ筒と木の枝をくみあわせたネズミ取り「ドウツキ」を使用している。



ワラ製「ネコイズミ」（加賀市歴史民俗資料館蔵）



木製「ネコノコヤ」（石川県立白山ろく民俗資料館蔵）

### 白山麓の「猫の子踊り」について

聞き取り調査の結果、白峰村周辺ではネコの飼育に関して様々な習慣があり、家畜のなかでネコは特別な扱いを受けていたことが明らかになった。また、この地域の民謡にもネコに関するものがあり、ネコを飼う習慣に関係があると考えられたため取り上げてみた。ネコに関係する民謡では、白山麓白峰村に「猫の子」（風嵐）、「猫の子踊り」（河内・市之瀬）という2つの民謡がある（白峰村史・下、1959）。

風嵐の「猫の子」については、直接、聞くことはできなかったが、ネコの餌に関して昔から「ニンシにネコ」または、「ネコにはニンシ、子ネコはカツオ」といわれていたことは、この民謡「猫の子」の一節「猫の子にや鯨じや」に関係があると考えられる。

市之瀬の「猫の子踊り」はおもに女性が歌い踊ったもので、現在では、高齢者のなかに歌と踊りをおぼえているものが少数あるのみである。市之瀬の住民は現在は村外に移住している場合がほとんどで、今回までの調査では実際に見聞することはできなかった。

白峰村史（1959）によると、この「猫の子踊り」と同名の盆踊りは福井県大野市や飛騨・白鳥地方にも行なわれていた。また、この踊りの成立年代は不明であるが、由来については河内（市之瀬）地方には独特の伝承があった。以下白峰村史から引用すると、「昔、河内地方では秋収穫の稗・粟等が鼠に荒らされて困惑していた。そのとき、笹木源五郎の末孫が始めて猫を連れてきた、猫が鼠を捕るのに驚いた住民はネコを大切にした。それから毎年豊年の祭りには『かんこ踊』・『はいや』のほか、猫を中央においてその周囲をおどることをはじめた。その踊り方も、猫を胴上げするような踊り方で河内独特のものだといわれている」。このことは、河内地方にはもともとネコを飼う習慣がなく、村外からネコを連れてきたことを示している。ネコを飼い始めた理由について述べられている種な例であろう。

「猫の子踊り」は次のような歌詞で始まる

「猫の子にゃしまいかい サードウジャイナー 猫は良いもんじゃ鼠とる

川に流れりゃ柳にかかる 死ねばお寺の手にかかる・・・」

民謡や伝承については慎重に扱うべきであるが、この歌詩のなかの「死ねばお寺の手にかかる」の一節などは、当時の住民のネコに対する扱いの一端を示しているのではないかと考えられよう。

## 考 察

## 1) ネコを飼う理由について

白峰村での聞き取りの結果、ネコを飼う理由については養蚕との関係が必ず述べられている。ネコと養蚕との関係は、早川孝太郎による「このごろ養蚕の衰微から、農家の猫は幾分減少したが、」という越中五箇山での記述があり(宮本・宮田編, 1974)、穀物用のネズミ捕りよりも養蚕との関係でネコが飼われていたことが示唆されている。また、特定の職業によって飼われるイヌと違い、貧富の差に関係無くネコが飼われていることも述べられている。

初めは実用面からネズミ捕り用の「家畜」として飼われたネコは、ネコイラズが普及してからも白山麓地域では特別に大切に飼われていた。例えば、季節出作りの場合、出作り地へ行く際にネコをカゴなどに入れて多量の荷物とともに必ず連れていった。また、ネコ用の飼育器である「ネコイズミ」「ネコノコヤ」など専用の用具を使ったことから同様のことが推測される。何故これほどネコを大切にしたのかについては、実用から転じて、愛玩用になったということだけでは理解できない。多雪地、山村の典型である白峰村の生活様式とも関係付けられよう。

聞き取り調査では、イヌを飼わない理由として、「エサをたくさん食べる」「散歩などの世話が大変」などの理由が上げられたが、ネコを飼わない理由については、特別な理由は聞くことができなかった。また、聞き取りのなかでは、ネコの飼育に関しての動物愛護など宗教的な理由などはなかった。

## 2) 「ネコイズミ」の名称について

白山麓でのネコの飼育器の名称は、木製のものを「ネコのコヤ」「ネコツブラ」ワラ製のものを、「ネコイズミ」と呼ぶことが多いが、材料・形態に名称が特定されているわけではない。これらの名称について、「ネコイズミ」は乳幼児用の育児カゴである「イズミ」もしくは「イズメ」と関係していると考えられる。白峰村史・下巻(1959)の写真には桑島で使用されていた木製の乳幼児用の飼育器があり、名称は「イズミ」である。また、小松市の民俗資料館にある木製と樹皮製の円筒型の育児器も「イズメ」であり、水田耕作地域によく見られるようなワラ製の育児カゴは白山麓の山村では少なかったのではないかと考えられる。しかし、民具資料のなかには、木製の「ネコノコヤ」とともにワラ製の「ネコイズミ」も多い。木製・ワラ製の材料の違いは、地域によるものか、年代によるものか現在の資料では判断は難しいが、ワラ製の物を使用していた理由は、聞き取りでは、「ワラのほうがネコが暖かい」とのことであった。

育児カゴの名称については、イズミ・イジコ・ツグラ・ツブラ・エズメ・フゴ・スタなど日本各地で様々な名称があり(宮崎, 1985)ネコ用の飼育器が存在する地方では、名称もこれと対応していることが予想される。

## 3) 「ネコイズミ」の分布

白山麓の「ネコイズミ」と同様のネコ用の飼育器は日本の各地で見られる。岐阜県明方村の「ネコイズミ」、新潟県関川村の「ネコチグラ」、新潟県村上市の「ネコツグラ」は、ワラ製釣鐘型で白山麓のものほとんど同形である。ほかには、秋田県阿仁地方、宮崎県椎葉村にもワラ製釣鐘型の物があったらしい(千葉徳爾先生のご教示による)。例は少ないが、これらの「ネコイズミ」の存在した地方は、多雪、焼畑耕作、養蚕のどれかとの共通性が見られる。多雪地で焼畑を行なっている地域でも福島県南会津地方「奥会津民族資料館」(会津田島町)の、民具資料のなかには「ネコイズミ」はない。この地方の焼畑は、穀物ではなく麻の栽培のために行なわれているため、白峰村の穀物栽培の焼畑とは異なる。多雪地ではないが焼畑をおこなっていた宮崎県椎葉村の場合は、白峰村と同様に穀物

栽培を行なっている。椎葉村にワラ製の「ネコイズミ」があったことは興味深い。ここにあげたものは少例に過ぎないためさらに多くの民具資料からの検討が必要であろう。以上述べてきた、「ネコイズミ」の分布を明らかにすることによって、ネコを「家畜」として飼っていた地域の自然条件、生産形態、生活様式などにみられる共通性を明らかにすることができると考えられる。

## 文 献

宮本常一・宮田 登編(1974) [早川孝太郎 全集] 第四巻, p.247-272. 「猫をめぐる問題 一, 二」 (初出は『旅と伝説』10巻10号. 1937年.)

白峰村史編集委員会(1959) 「白峰村史」下 924p.

宮崎 清 (1985) 「葉 I」ものと人間の文化史55-I, 369 p. 法政大学出版局.

———( ) 「葉 II」 " 55-II, 383 p. 同 上.